

山と博物館

第19巻 第3号 1974年3月25日 大町山岳博物館



水ぬるむ(木崎湖)

撮影 丸山隆士

冬山入山者のマナーABC

今年も相次ぐ冬山の遭難事故が起きている。冬山入山者数は、年と共に増し、経験不足や基礎訓練の未熟さから、無謀な行動を起して遭難している件数が多くなった。最近の冬山登山者の中には、夏山と違った冬山の厳しさのあることも知っていないながら、気がつかずに計画し、行動して事故に遭遇している。登山者としてのマナーABCさえ知らないのではないかと疑いたくなる昨今である。

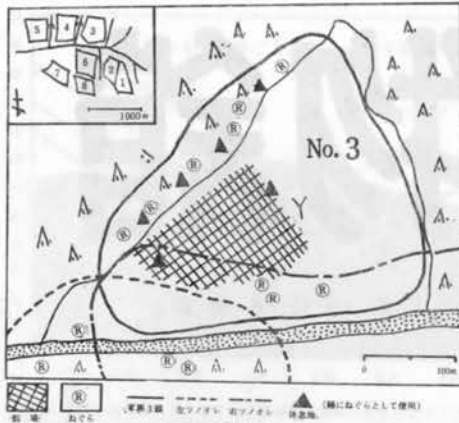
最近の登山路や湿原に、また山小屋周辺付近に空ビンや空カン、それに残飯等が散乱し、悪臭を放つ汚物やゴミの山を見かけるようになった。その多くは、冬山登山者のキャンプ地跡であって、登山者の使用した廃棄物であり排出物である。白一面の雪原ではあるが、その場所がどこであるかを良く知って、排便に気をつけてほしいものである。残飯や廃棄物は、キャンプ地撤収の際に、綺麗に清掃し、一定の場所を選び雪の中へ埋め込んで処理しているものと思われる。中には、寝床として使用したダンボールを、そのままにして下山した登山者もいるようである。春になり雪が消えた冬山登山ルートには、こうして清掃したつもりの廃棄物が、ゴミの山となって現われ、山をよごし水源地を汚染している。

長野県の山岳会では、夏山登山者に「持ち帰り運動」を呼びかけ自ら実行している。山を常に綺麗にして、よごすまい犯すまいの自然保護運動が徹底してきた今日、冬山登山者にも同様持ち帰りのマナーを徹底してほしい。廃棄物を処理しなければならぬ時は、燃えるものは焼却してから必ず埋める場所がここへ埋め込んで処理してほしい。最近の山の汚染の一つに、冬山登山者のこうしたマナーの欠けているパーティーが多くなったことによることを警告したい。

(長野県大町高等学校教諭 小野貞雄)

冬のカモシカ的生活

宮崎 学



№3調査区と概略

日本にすむ代表的な大型哺乳動物であるニホンカモシカの研究はたいへん難しいといわれている。カモシカのすむ環境が人も近づけないような山奥か急峻な岩場であるため、今日まで本格的な調査がなされていなかったようである。加えて、その数も絶対的に少なく、分布も限られており、どこにでもいるという動物ではないためにいつそうカモシカを遠くのものにしてきてしまったようである。

私は早くからこのカモシカに興味をもち、その生息地を探してきた。その結果、中央アルプスに相当数のカモシカが生息していることをつきとめ、その生態研究を進めることができたので、ここにカモシカの冬の生活について少しのべてみたい。

中央アルプスは長野県の南部に位置してお

り、木曾谷と伊那谷へ深く急峻な谷を落している。三〇〇メートルに近い主峰駒ヶ岳を中心に、雪深い山脈は遠く岐阜県にまで続いている。この中央アルプスは岩場が多く、山の斜面も急なためカモシカの好適な生息地となつていようであり、数多くのカモシカを確認することができた。

一九六七年三月、私は中央アルプスの中御所谷ではじめてカモシカを目撃した。以来毎回カモシカが目撃でき、多い日には最高二〇頭近いカモシカを観察することができた。はじめのうちはその珍しさから生息写真に夢中になつていたのであるが、一九七一年の冬から本格的に観察をするようになった。

中御所谷は主峰駒ヶ岳の麓にある峻険な谷である。冬期間は積雪が一―五メートルと深く、この多雪地の標高一四〇〇―一八〇〇メートルがカモシカの調査地である。谷を挟んだ山の斜面はところどころに原生林を残すほかはすべて伐採されている。この伐採地を林縁にそつてNo.1―8まで調査区に設定した。調査区の中でもつとも調査がやりやすいNo.3の調査区に生活する親子と他の三頭のカモシカの計五頭を個体識別して、その行動を追つてみた。

五頭のカモシカの個体識別は簡単にできた。五頭のうちの二頭までがツノが折れていたのである。一頭は左のツノが基部から二センチばかりを残して折れ、もう一頭は右のツノが先端から約二センチのところまで欠けていた。体色も左ツノ折れ個体が茶褐色の中型個体であり、右ツノ折れ個体は灰褐色の大型個体である。またこの二頭はいずれも雄カモシカであつた。

親子のカモシカは雌親は中型の灰褐色タイプで子供は黒褐色であつた。もう一頭のカモシカは灰褐色で大型であり、雄であつた。雌雄の判定は小便スタイルをポイントにし、体型でもおおよその判別ができた。小便をするとき、雌は尻を深く落し背と地面との角度が45度くらいになるのに対し、雄は雌よりも尻を落さず、背と地面とがだいたい平行であつた。また、体型では雄のほうが少し大きく、体全体がしまつて一見スマートであるのに対し、雌は背も少し小さく、全体にずんぐりとしていた。

この五頭のカモシカにそれぞれ個体識別用の名前をつけ記録することにした。ツノが折れたカモシカには、左ツノ折れ、右ツノ折れ、また親子の雌親にはプス、子供にはベチャ、雄にはカクガリと名前をつけた。

こうして個体識別したカモシカを双眼鏡と25倍プロミナーで確認しながら、それぞれの動きを白地図へ五分ごとの時間マッピング法で記入していった。白地図は二五〇〇分の1の航空写真より作成した。

カモシカは家族生活であつた。カモシカは今まで単独で生活し、一頭、一頭が強いテリトリーを持ち、排他的であるといわれてきた。しかし、No.3の親子とカクガリの三頭を観察してきた限りでは、そのような雰囲気は少しも感じられなかつた。

プスとベチャの二頭はいつも親子で行動をしており、もう一頭のカクガリは、この親子から五―七メートルの距離内の行動が多かつた。その行動のほとんどがお互いに見える範囲内である。そして、一〇―二〇メートルという近いところに、どちらかのカモシカが近づいても何の追ひ合いも見られなかつた。追ひ合いが見られないどころか、もつと近づき、鼻と鼻をつき合わせて挨拶さえ交わすのである。挨拶の後はそのまま別々に移動採食

に移ることもあれば、親子三頭が一緒になつて採食を続けたり、三頭とも雪の上に坐つて反すうを行なうところを何回か観察することができた。しかし、三頭が一緒にいるということは一日中ではなく、反すうの時には半日ぐらひは一緒にあつても、採食しながらの移動では二時間ぐらひである。このように三頭一緒にの同時行動は時間的に少ないけれども、五―二〇メートルくらいの距離内で三頭一緒にの行動はかなりの長時間にわたつて観察された。また、このような三頭での行動は親子とカクガリだけであつて、No.3に住む他のツノ折れ個体との同時行動は全く観察されないことから、この三頭は家族であると考えられる。また、親子三頭での行動は調査区に根雪の見られる十一月から四月まで観察されたことからカモシカは少なくとも冬期間中は家族生活であると思われる。

採食とねぐら

早朝からカモシカを観察していると、ねぐらから出て移動しながら採食をし、再びねぐらへ入るのにもよく通るメイシルトができていた。そして、そのメイシルト上に餌場があり、カモシカはその多くの時間を餌場で過していた。

カモシカのねぐらとして一番多く見られるのが岩陰ねぐらである。そして倒木のうしろか雪穴である。このようなカモシカのねぐらとなるところはNo.3には沢山みられ、ねぐらとして使用した箇所だけでも10ヶ所近くもあつた。ねぐらは毎日同一場所を使用するのではなく、移動しながらの採食ルートによって一番近いところのねぐらが使われていた。そして、ねぐらは家族のカモシカでは雄でも親子でも日を変えて同一ねぐらを使用し、共有化されていた。

No.3では餌場が行動圏のほぼ中心にあり、ねぐらはその周辺に多く見られた。また、伐採地が主な餌場となつており、行動圏の中心

にあつた。

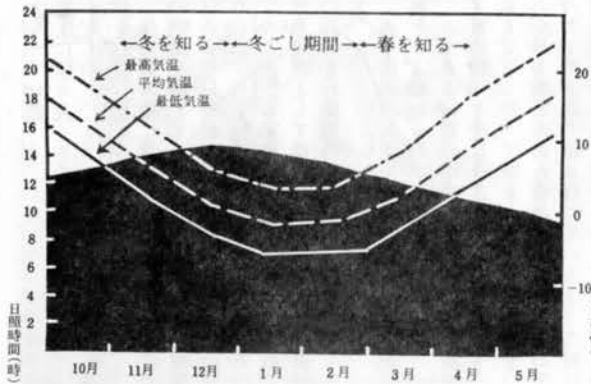
親子のカモシカは雌親は中型の灰褐色タイプで子供は黒褐色であつた。もう一頭のカモシカは灰褐色で大型であり、雄であつた。雌雄の判定は小便スタイルをポイントにし、体型でもおおよその判別ができた。小便をするとき、雌は尻を深く落し背と地面との角度が45度くらいになるのに対し、雄は雌よりも尻を落さず、背と地面とがだいたい平行であつた。また、体型では雄のほうが少し大きく、体全体がしまつて一見スマートであるのに対し、雌は背も少し小さく、全体にずんぐりとしていた。

この五頭のカモシカにそれぞれ個体識別用の名前をつけ記録することにした。ツノが折れたカモシカには、左ツノ折れ、右ツノ折れ、また親子の雌親にはプス、子供にはベチャ、雄にはカクガリと名前をつけた。

こうして個体識別したカモシカを双眼鏡と25倍プロミナーで確認しながら、それぞれの動きを白地図へ五分ごとの時間マッピング法で記入していった。白地図は二五〇〇分の1の航空写真より作成した。

カモシカは家族生活であつた。カモシカは今まで単独で生活し、一頭、一頭が強いテリトリーを持ち、排他的であるといわれてきた。しかし、No.3の親子とカクガリの三頭を観察してきた限りでは、そのような雰囲気は少しも感じられなかつた。

プスとベチャの二頭はいつも親子で行動をしており、もう一頭のカクガリは、この親子から五―七メートルの距離内の行動が多かつた。その行動のほとんどがお互いに見える範囲内である。そして、一〇―二〇メートルという近いところに、どちらかのカモシカが近づいても何の追ひ合いも見られなかつた。追ひ合いが見られないどころか、もつと近づき、鼻と鼻をつき合わせて挨拶さえ交わすのである。挨拶の後はそのまま別々に移動採食



長野県における10月から5月までの日照時間と気温の変化のようすを示している。虫たちは自然界のこれらの規則正しい変化を体で感じとり季節の移り変わりを知る

長く重苦しい冬から開放されるよろこびは虫たちにとっても私どもと同じで、春は生命の躍動をよびおこす。しかし、春は虫たちにとってはその以上に種族繁栄のための大切な時であるから、陽気にうかれてばかりはいられない。

だから、虫たちはくるであらう春をだれよりも早く予期し、準備をはじめ。冬ごし(越冬)がそれである。山なみが紅葉につつまれ、私どもがその美しさに気をとられている頃、虫たちは日一日と変化する気温や水温の低下、日照時間の短縮(図1)という自然界の規則的な変化を的確によりと、やがて訪れる春を予期し着々と準備をはじめ。

春をまつ冬ごし

虫たちにとって、長く長い冬をすごすことは並大抵のことではない。しかし、種族をたやすことなく維持するためにはどうしても冬を越さなければならぬ。卵や蛹のように十分に栄養を貯えて冬ごしをするものはまだし

も、幼虫や成虫のよから栄養をとりながら生活するものでは餌をとることができない。冬の間自分の体を養う

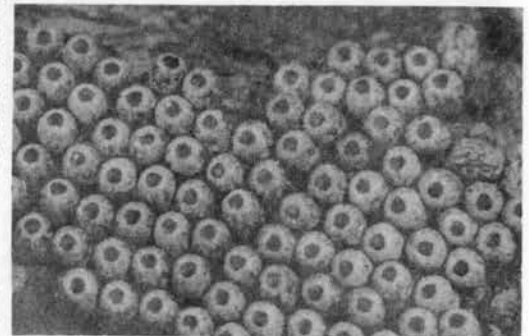
だけの栄養を、冬ごしの前に自分の体のなかへとりこんでおかなければならぬ。だから幼虫や成虫は冬ごしの準備として、秋のうちにとん欲なまでに幼虫は草や木の葉を食べ、チヨウは花の蜜をあさりつづける。

そして、十分な栄養を得た虫たちは、雪がくる前に、枯草のなかや木や岩の割目、人家の軒先などにはいり冬にそなえる。体の中に貯えられた栄養は長く長い冬をすごすためのエネルギー源として大切に利用されるが、春までにはその大半が使いはたされる。だから無事冬ごしをしてきた虫たちの体重は、どれもこれも、冬ごし前より軽くなっている。

冬ごしのさまざま

どの虫も、卵→幼虫→成虫又は卵→幼虫→蛹→成虫という発育の段階をへて一生を終え

虫たちの中の春 (1)



が、どの段階で冬をむかえるかは種類によってちがっている。卵や蛹ですごすものもあれば幼虫や成虫ですごすものもある。また、冬ごしのしかたもさまざまで、枯草や落葉の下で眠ってすごす(冬眠)ものもあれば、眠ることなく、条件さえよければいつでも活動できる状態で寒さをしのいでいるものもある。そうかと思えば冬になってようやく成虫があらわれ、活動しだす虫もいる。

雪にまう虫たち

冬ごしをしないというより、どの虫よりもいち早く春の気配をよみとる虫といったほうがよい虫たちである。その筆頭がユキムシとフユシヤクである。

ユキムシはカワゲラという川の中にいる虫の仲間、成虫が春先に羽化し雪の上などを歩きまわるのでこの名がある。木崎湖や中綱



雪の上で交尾中のユキムシ

倉田 稔

湖から流れる農具川や北アルプス山麓の小川の水辺で、雪の上にゴマシオをまき散らしたように、体長5〜10ミリ程の黒い虫がウヨウヨしているのがみられる。ユキムシは県内の各地で見られ、種類も数種類いるが

特によく目につくのが安曇野や志賀高原、飯山地方などの多雪地帯である。

雪の上でユキムシはそそくさと遊び交尾姿を消してしまふ。まさに淡雪のような命である。雪の上にユキムシを見つけると人々は春の近いことを知るのである。

ユキムシに相前後してあらわれるのがフユシヤクというガの仲間である。フユシヤクとは冬にでる尺取虫という意味であるが、冬にでるのはその成虫で、いわゆるガである。

県内には数種の仲間がいて、早いものは秋に出るが、春先にも多くみられる。フユシヤクは雑木林で普通にみられるものであるが、とびあるくのは夜だけなので、普通の人にはあまり気づかれない。この仲間のガは普通の方とちがいで、めすには翅がなく、太い体を引きずるようにして木の幹をはつている。林の中を自由にびまわられるのはおすで、おすはもっぱらめすへの訪問にあけくれている。翅をひろげると2.5センチほどの大きさで、灰色のうすい翅はしなやかで、風にとぶさまは舞うといったほうがふさわしい。静まりかえった黒木の森を月あかりを反射させながらヒラヒラ舞うさまはまるで雪の精である。

山と博物館のこの号がでる頃、博物館や鹿島川のまわりの雑木林では何種類かのフユシヤクが乱舞するのがみられる。

しかし、この頃では雑木林が少なくなつたり、小川がよこれフユシヤクやユキムシが少なくなつていくことは誠に残念である。これらの虫たちが姿をみせると北アルプスの雪は一段と春の輝きをまじえ、あちこちに雪崩のあとを見せるようになる。

(飯山市第二中学校教諭 山岳博物館嘱託学芸員)

山と博物館 第19巻 第3号
一九七四年 三月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL②〇二一
印刷所 大町市山下仲町 山岳博物館
定価 年額 四〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号(長野二二、二九三)